

中津地方における医学教育の近代化について

ミヒエル, ヴォルフガング
九州大学：名誉教授

<https://hdl.handle.net/2324/1498291>

出版情報：青木歳幸著『西南諸藩医学教育の研究』， pp.61-84, 2015-03-27
バージョン：
権利関係：



平成24～26年度 科学研究費補助金（研究種目 基盤研究（C）） 研究課題番号 24520760

「佐賀藩・中津藩・長州藩を軸とする西南諸藩の医学教育の研究」報告書

西南諸藩医学教育の研究（二〇一五年三月） 抜刷

中津地方における医学教育の近代化について

ヴォルフガング・ミヒエル

中津地方における医学教育の 近代化について

ヴォルフガング・ミヒエル

キーワード

医学教育、豊前中津、進脩館、医学館、

中津医学学校、大江家、村上家、屋形家

豊前中津の諸条件について

中津藩は、豊前国下毛郡中津周辺を領有した藩である。幕府の直轄地長崎や薩摩、対馬、福岡および佐賀などと比べ、近世の豊前中津は海外との交流や海外情報の収集という点において決して恵まれてはいなかった。人、もの、情報があふれる長崎街道に繋がる中津街道は周防灘沿岸に約五キロも続き、西へ行くには山岳地帯を越えなければならなかった。このような地理的制約を受け、中津地方の人々の視線は東へ向いていた。瀬戸内海地域は、古来より海上交流で発展し、一種の経済文化圏を形成しており、中津港は、この交通網に組み込まれた拠点であった。大坂に置かれた蔵屋敷は、江戸の上・中屋敷とともに情報収集の場として重要な役割を果たした。しかし、海外より国内に目を向けがちな状況でありながら、中津藩は一八世紀中頃からの学問の近代化に敏感に反応し、蘭学の発展において歴史的功績をあげることになった。その原動力は、当時の人々の探求心や先を読む力、行動力などである。



図一 江戸時代の北部九州（九州九ヶ国之絵図、文化十癸酉正月 [1813]、文叅堂開板）

天正一五「二五八七」年、黒田孝高よしたかが入部し、約一二万石を領有したが、一七世紀末頃まで藩の政策を取り巻く状況は不安定だった。

細川家（一六〇〇～一六三二年） 三九万九千石

小笠原家（一六三二～一七一六年） 八万石、後に四万石

奥平家（一七一七～一八七二年） 十万石

明治初期の廃藩置県で、中津地方の所属先は中津県、小倉県、福岡県、大分県の順に変更された。

近世の中津地方における医療関係者

近世の中津藩における医療は、全国各地との共通点が少なくない。中世医療の崩壊後、世俗化が進み、仏教の僧医に変わって民間の医師が増え、やがて村医、町医師および藩医が藩民のための医療を担うようになった。江戸期の関連史料は十分ではないが、村上家¹、大江家²、辛島家³、根来家、田渕家⁴、前野家⁵、藤野家⁶、久松家、山辺家⁷、田中家⁸、屋形家⁹、深水家¹⁰など、世代を超えて医業を営む医家についてはある程度調べることができる¹¹。「室屋」菊池家が中津市立小幡記念図書館に寄贈した「市令録」に、享保二「二七一七」年中津城下で医療にあたっていた医師の名が列記されている¹²。

新博多町

本道 石川正周

米町

本道 萩原玄智

、 平田道悦

、 瀬川寿元

、 川依寿仙

、 生野立庵

、 権藤養用

、 川野見龍

諸町

本道 村上玄水

、 辛島正庵

針 ぬし屋八右衛門

姫路町

本道 生野道珉

、 佐野香庵

新魚町

本道 多加谷玄淑

、 成久杏庵

、 津川玄碩

、 二木義仙

、 外科 林 昌伯

堀川町

針 一松杢右衛門

外 小林助之丞

針 鋸屋太兵衛

桜町

外 戸次宗竹

、 木村用安

、 水野九兵衛

古魚町

本道 廣山友慶

、 村上弥三兵衛

合 本道拾六人 貳拾七人 外科四人 針治参人

米町

眼科 久野屋孫右衛門

寛政一二「一八〇〇」年には、「町医御用相勤候頭」として一五名の名が記されている。

内治 久恒元迪、市場津庵、萩本権策、高瀬康哉

眼科 重松尚賢

外治 田中信平、神尾雄朔、栗山雄倫

針治 齊藤玄仲、島出隆沢、大江又真、久松友声、西 文慶、松尾

求古、小幡貞安¹³

村上医家の七代家督玄水が天保一四「一八四三」年に行なった九州で二番目の人体解剖に関して、見学者の記録が残っており、当時人体の構造に関心を寄せていた豊前地方の医師の名を伝えている¹⁴。

【中津城下】 辛島正庵、松川修山、大江軍司、根来東俊、根来東林、小幡惠意、大江貫如、原田養賢、久恒玄篤、藤本玄泰、東玄硯、橋本玄成、平野玄遂、加来道一、藤野玄悦、松本賢立、田代一徳、重松元恭

【古城、中津鶴居】 横井湧泉、横井専意

【下毛郡】 伊藤玄伯、藤本杉亨、篠島白民、安田円、久恒寿斉、思塚幽玄、築玄亨、朝山玄固、久恒圭甫、田口明哲、宮永頑輔、田淵元亨、一松耕玄、美原硯民

【宇佐郡】 土岐春良、末松拙斉、木下東庵、大江玄一、敷田謙亨

【築上郡】 恒遠文恭、大辺杏寿、宇野広範、林玄達、橋爪圭民、生口綱輔、星見文祐、金苗見竜、中村寛助、今永良平、今永圭司、土佐井玄良

【日田】 日田圭司

【神田】 福田運平

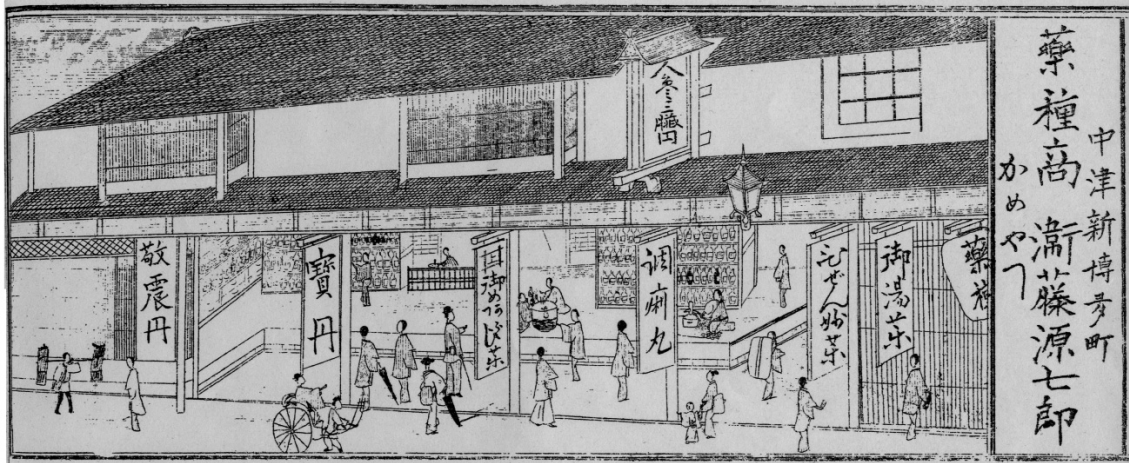
【田深】 山下玄一

【月股】 柳井龍徳

【大坂】 坂金吾

江戸詰の医療関係者はまだ確認されていない。これまで名前が確認された唯一の事例は、明和・天明頃、築地鉄砲洲の中屋敷で産科医として一家を成し、「産育編」(三卷)を著した山辺文伯である¹⁵。藩主の参勤交代に随行した大江・村上両家の御典医が、江戸滞在中、木挽町汐留や鉄砲洲で藩士らの面倒を見たかもしれないが、多くの場合は、江戸の町医師が呼び出されたであろう。また、小規模の大坂蔵屋敷に藩医が常住していたとは考えにくい。医業によって後世に名を残した医師はいなかったものの、中津藩の江戸屋敷は別の形で医学史において大きな役割を果たした。中屋敷において、中津藩医・前野良沢(一七二三〜一八〇三)¹⁶が同志とともに解剖書『ターヘル・アナトミア』の翻訳を進め、また安政五「一八五八」年に福澤諭吉がここで、後に慶應義塾の基となる蘭学塾を開いた。また、蘭学史の一里塚ともいえる『蘭語訳撰』(一八一〇年刊)および『中津バスタールド辞書』(一八二二年)という二つの「中津辞書」も、ここで編纂された。

医薬分離のない時代に、大江家と村上家のような地方の医師は薬園を持っていたが、漢方であれ蘭方であれ、治療薬の一部は薬種商を通じて取り寄せなければならなかった。江戸中期までの状況は不明であるが、江戸後期・明治初期には新博多町で衛藤源七郎および森松蔵¹⁷が店舗を構え薬種商を営んでいた。



図二 衛藤源七郎の店舗（松田竹園画）。泉亀吉（1886年）より



図三 森松蔵の「精々堂」（松田竹園画）。泉亀吉（1886年）より



図四 豊前中津野上屋助七の売薬札（中津市大江医家史料館蔵）

これらの薬種商が医師と協力しながら、売薬を開発した例もある。大江医家に残っている一連の版木には、「豊前中津野上屋助七」が調査した「如神丸」や、蘭方と称した疑似薬がある。

近世の中津藩における知の伝達

当時の豊前・豊後における民衆教育は非常に先駆的なものだった。士族の子弟を対象とした家塾や私塾が登場する前に、すでに数多くの寺子屋があった。とりわけ中津藩の寺子屋数は一三三にも上り、きわめて多かった¹⁸。この庶民の知識欲は、後に藩の教育政策にも影響を与えた。

江戸前期の中津における高等教育については、詳しいことはわからないが、自らの力で学習塾を開いた町人がすでに存在していた。小笠原時代（一六九八〜一七一六）に儒者安東省庵せいはんや貝原益軒と親交があり、伊藤仁斎の学説を提唱した豪商・富永鈍翁どんのう（一六五〇〜一七二六）は、開善寺、円応寺および私邸で、藩主と藩士に『孟子』、『易経』などを教授したと伝えられている。養子となった富永仁里（一六九七〜一七六一）¹⁹は、その塾を受け継いだ²⁰。

奥平氏の中津移封で、藩はより積極的に学問を奨励するようになった。宮津で召し抱えられた儒者・村上重斉および土居震八が藩主とともに中津に移り、以前から行われていた月並講釈を再開した。出席状況があまり芳しくなかったため、享保四（一七一九）年七月に、藩士の学習を促進する布令が出た。

「奥平家ノ定法ニ、凡藩士ハ政ヲ為シ民ヲ治ムルニハ、書ヲ讀ミ、道ヲ知ラザルヲベカラズトナシ、例月儒者ヲ城中ニ召シテ、経書ヲ講シ、

之ヲ小姓以上士分ノモノニ聞カシム」²¹

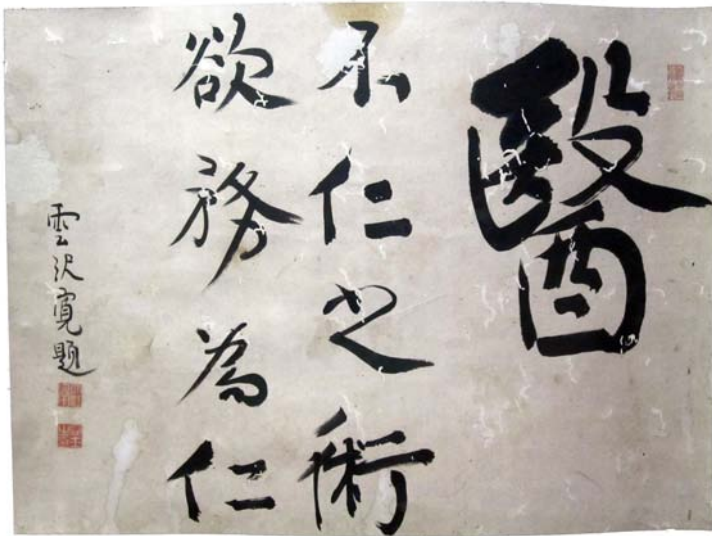
このような形の「公的教育」は以降も続いていた。宝暦二（一七五二）年、師・土居震八とともに堀川学派に属する藤田敬所（一六九八〜一七六六）²²が儒臣となり、その門人には後に独自の学問体系を築いた哲学者・医師の三浦梅園および倉成竜渚りゅうしよらがいた。当時は、日出藩士・原田東岳とうかく（一七〇九〜一七八三）が中津で儒学塾を開き子弟に教えていたが、厚遇されてはいたものの儒員には列せられなかった。教育環境を安定させるためか、藤田敬所の没後、中津藩が出した家督令に、儒学者の世襲を促す規定が盛り込まれている。

「儒者ハ其業ヲ以テ命シ、若嗣子其器ニ乏シキトキハ、其旧家格ニ因リテ之ヲ命スベシ」²³

寛文九（一六六九）年に、岡山藩が他藩に先駆けて「国学」という藩校を開いたが、全国的な広がりを見せるのは一八世紀中頃からである。天明六（一七八六）年に藩主奥平昌男の末期養子として家督を継いだ昌高公の最初の業績として多くの研究者が藩校「進脩館」の開設を挙げているが²⁴、同館が設立された寛政二（一七九〇）年には昌高はまだ少年だったので、大きな貢献があったとは思えない。むしろ、赤穂藩の赤松滄洲そうしゅう（一七二二〜一八〇一）や京都の松本愚山（一七五五〜一八三四）に学んだ後、天明七（一七八七）年に中津藩の御儒者見習となった野本雪巖せつがん（一七六一〜一八三五）および倉成龍渚の個人による活動が「進脩館」創設につながった。当面の間、雪巖の家塾が「進脩館」の講堂として利用されたのは偶然ではない。寛政八年、片端町にあった稽古場が聖廟、講堂、塾舎

を備えた公的教育施設に拡充され²⁵、倉成龍渚と野本雪巖は教授に任じられた。運営管理方針は「進脩館草創紀律」(十二ヶ条)で定められた²⁶。

進脩館創立の寛政二年に、幕府が農業と上下の秩序を重んずる朱子学以外の学問を「異学」として規制したので、当初は朱子学が学ばれたが、ほどなく倉成は、師・藤田敬所の古義学を講じるようになった。また学則に、経義朱註を主とし、併せて古註を用いることを定めた。進脩館の教授として、吹出浜(中津市)古表社祀官の家に生まれた九州国学の三大家の一人渡辺重名(？〜一八三〇)の名も見られる。重名は荒木田久老^{ひらきのおれ}、本居宣長のもとで国学を修め、進脩館で皇典講釈を月三回行なった。中津藩上士の子弟は七、八歳頃になると必ず入学したが、後には町人の子弟も入学



図五 明治4年に設立された中津医学学校の初代校長大江雲澤の書(中津市大江医家史料館蔵)

できるようになった。国学、漢学、洋学、医学、筆道、算術、兵学、弓術、馬術、剣術、槍術、砲術、抜合、柔術、遊泳という一五学科は文事も兵事も重視する方針を反映している²⁷。地元の藩医の子弟の基礎教育はこゝで行われていた。

先行研究に挙げられている講義科目に医学も見られるが、その講義は医学を用いて病気の診断や治療を教える内容だったとは考えにくい。おそらく、気の通り道としての身体や、運氣論など漢医学の思想的基礎知識を教えていたと思われる。また、仁徳の実践を説く孟子の「今有仁心仁術、而民不被其沢、不可法于后世者、不行先王之道也²⁸」を根元とする医療倫理の中心的標語「医は仁術也」について、藩校の儒者たちが詳細に講じたことは容易に想像できる。とりわけ、古義学を提唱する倉成龍渚は、その祖・伊藤仁齋と同様に学問は人間性の修練であるとし、「仁」を儒教倫理の最高の徳目として位置づけていたに違いない²⁹。中津御典医・大江文明(一七五七〜一八二二)の医則第一「医者不仁之術勉為仁矣」や同医家の第五代大江雲澤(一八二二〜一八九九)の格言「医不仁之術欲務為仁」は、この儒学に基づく価値観が地元の医界に深く浸透したことを裏付けている。

中津藩における書物の流布

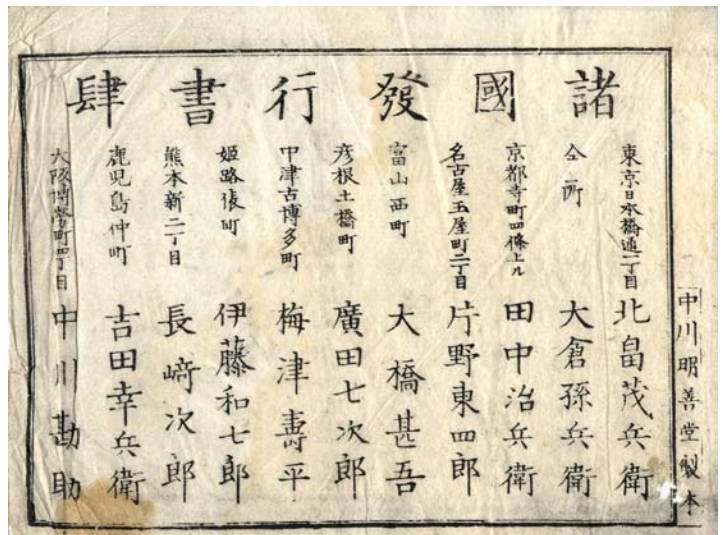
ヨーロッパの修道院、大学、専門工房などで行われていた書物の書き写しは、活版印刷技術の発明(一四四五年)により廃れてしまったが、木版印刷による商業出版が本格化した江戸期の日本では、高価な版本や師語録、出島通詞の記録資料など活字にならない写本の書き写しは幕末頃まで情報の伝播に重要な役割を果たした。村上家、大江家、屋形家などに伝わ

る医書の多くは、遊学先で写されたものであり、一部には中津にしか残っていないものがあるようだ。

中津地方は人口が少なく、書籍の市場としては小さかったが、数々の版本を調べるうちに、本屋の存在が判明した。元禄年間に刊行された『通俗漢楚軍談』および『御家消息往来全』の巻末にある「諸国發行書肆」に、「豊前梅津壽平」や「豊前幸了屋壽平」の名が記載されており、寛延年間より幕末にかけて、『荀子』（二八二七年刊）、『韓子解詁』、『茶道聞書集』、『茶道筌蹄後編聞書』、『家相圖説大全』、『地理風水家相一覽』、『史記觸』、『群書一覽』、『高青邱詩集』、『通議』、『新策』、『西國三十三所名所圖會』、『星巖集』、『紅蘭小集』、『玉池吟社詩』、『洗心笑樵記』および『詞瓊綸』の出版と流通に携わっていた。梅津屋は、大正頃まで続いていた。医学関係の出版物としては、本郷正豊の著名な『鍼灸重寶記』（寛延二〔一七四九〕年刊）および加賀藩校「明倫堂」で学頭を務めた儒学者・新井白蛾の『古易察病傳』（寛政十〔一七九八〕年序）の二例が見られるのみであるが、上述の書物は、あらためて中津地方における教育の高さを裏付けている。

医師の専門的養成と生涯学習

代々にわたり中津地方で医業を営んだ医家の初代家督の殆どは、専門知識を他所で身につけた後に中津へ移り住んだ。小笠原藩医・村上宗伯（寛文一〇〔一六七〇〕年没）は、その最も古い事例である。宗伯は村上蓮休の三男として行橋の浄喜寺で生まれ、曲直瀬道三流の医学を受け継いだ大坂の古林見宜（一五七九〜一六五七）に師事し、寛永一七年〔一六四〇〕七月に医師開業の免許皆伝を受けた後、中津諸町で医院を開業した。明和二〔一七六五〕年に、奥平昌鹿公から本道御医師に召し出された根



図六 本郷正豊『鍼灸重寶記』（寛延2 [1749] 年刊）に見られる発行書肆（筆者蔵）

来東麟（東林）は、「人身連骨真形図」で画期的な功績を残した根来東叔（一六九八〜一七五五）の長男として山城で生まれ、京都で育った。中津付近の天仲寺山にある墓碑は、朱子学、本草学、中医学の古典に精通していた東麟の知識の幅広さ、「西学」に対する考え、および古方に根付いた姿勢のみならず、その知的基盤を提供した父東叔の医術についても詳細に伝えている。

「辛島家系図」によれば、初代辛島正庵玄快（一六七八〜一七六九）は、延宝六〔一六七八〕年宇佐郡辛島村で生まれ、元禄一二〔一六九九〕年から小笠原侯の医師平田道巴に医術を学び、その二年後京都に遊学し、さらに長崎で腕を磨いた³⁰。彼は元文四〔一七三九〕年、六一歳で待医となつ

た。平田道巴が辛島正庵に渡した父・長大夫の修業証書（一六六六年）の写しには出島オランダ商館医および商館長の蘭文があり、一六五〇年代に芽生えた紅毛流外科術がすでに中津地方まで伝わったことを示している³¹。

中津藩の医学史に名を残した、鷹匠町と京町の二つの大江医家の血縁関係を裏付けるのは、藩の「文化三年改」に集録された大江玄仙および大江雄山（博行）の系図である³²。大江五郎衛門の長男として生まれた両家の祖・玄仙（一七一〇～一七九二）は、長崎で鳥飼道節から嶋田道碩に伝わった栗崎流（南蛮流）外科を学び、宝暦四「一七五四」年に栗崎流外科の免許皆伝を受けた。当時は約一〇〇年前に始まったこの外科術がまだ高



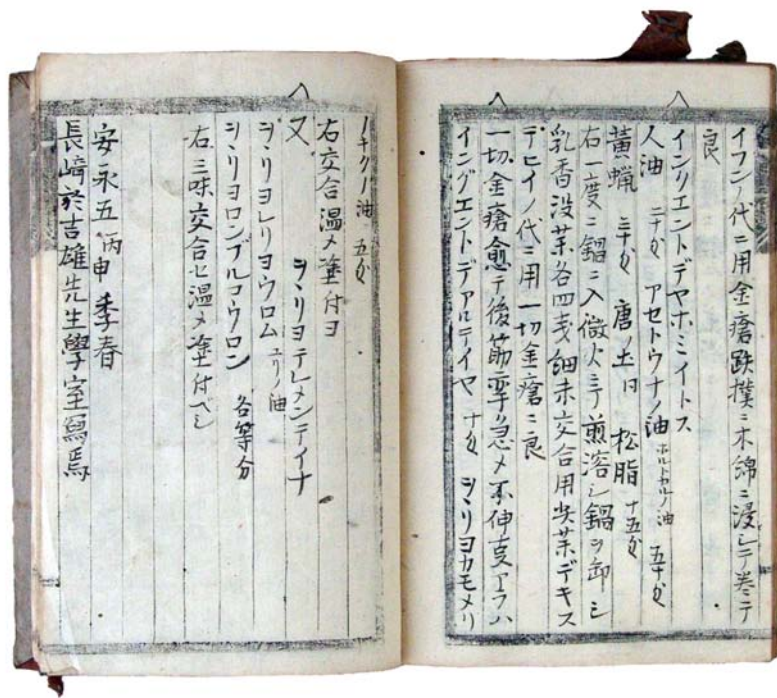
図七 晩年の中津藩医・辛島正庵玄快（1678～1769）（中津市辛島家蔵）

く評価されており、玄仙は宝暦八「二七五八」年に中津藩に召し抱えられ、隠居するまで二三年間御典医を務めた。

現在の本耶馬溪地区にあたる西屋形村で医業を営んでいた屋形家は、もともと宇佐大宮司家の宇佐守節に遡り、宇佐氏は以降八代にわたって、権大宮司職を務めながら、宇佐宮と関係の深い大根川神社の社司を兼務していた。一三世紀末頃には、屋形谷地方への定着を意味する「屋形」の姓が生まれたようだ³³。奥地の小さな集落の医師・屋形諸道（文政九「一八二六」年没）が受けた教育や、彼が医業を選んだ経緯は不明である。諸道は安永四「一七七五」年に「龍渚倉先生之宅」で「詩経」と「采藥漫筆」のほか、「外療内治法」という医書も写し³⁴、翌安永五年には、少なくとも一年間長崎で過ごしている。諸道関連の一〇冊の写本はすべて長崎の「吉雄先生学室」で作製されたもので、『解体新書』の発表と同時期の吉雄耕牛の塾において、子弟たちがどのような資料を写し、どのような医療を学んだかを伝える貴重な史料である。

長崎の名医向井元升（一六〇九～一六七七）のように儒学を起点に医学を独学で修得した例もあるが³⁵、医業を志した初代藩医の多くは、幅広く修行した上で、召し抱えられた。高名な師から受けた免許皆伝状は出世の前提条件であり、長崎への遊学は、医師としての付加価値をさらに高めるものだった。

江戸期の医家の二代目家督は幼い頃から父の医療活動と研究を身近に体験しながら一定の知識を身につけることができたが、遅かれ早かれ故郷から離れ、他所で本格的な専門教育を受けることになる。緊密な師弟関係の下での医学伝習は、ヨーロッパの外科組合における見習い制度との共通点があるが、専門知識の扱いは大きく異なっていた。修行期間満了時に行われていたヨーロッパの検定試験は、組合規定に基づいており、地元の大学



図八 村医・屋形諸道が長崎で作製した写本（中津市歴史民俗資料館蔵）

教授などによって監視される公共性の高いものだった³⁶。このような形で専門的基盤を築き上げてから、若き外科医は修行の旅で視野を広げ、腕を磨き、技を増やしていった。それに対し日本では、門弟に伝えた知識を秘伝のものとする場合が多かった。近世に形成されたこの家元制度は、知の普及を著しく制約し、広範囲にわたる医療体制の確立を妨げる要因の一つとなった。

中津藩医の世襲は必ずしも順調に機能していたわけではない。実子がなく養子を迎えることも決して珍しくなかった。また、自ら回り道をする若者もいた。後に人体解剖で名をあげる村上玄水（一七八一〜一八四三）

は、寛政八（一七九六）年に設立されたばかりの進脩館に入り、倉成龍渚や野本雪巖の指導を受けた。しかし、その二年後、久留米藩の儒官・梯隆恭（一七六八〜一八一九）に入門する³⁷。ここで玄水は三年間特に兵法・軍学を学んだ。村上医家史料館に伝わる史料から、玄水が非常に真剣にこれらの学問と取り組んだことがうかがえる。数巻からなる写本『軍法極秘傳書』の中に、詳細な陣の図や兵法作戦図などが多数見られる。文化三（一八〇六）年、玄水は中津へ帰還する。この年、安芸国宮島出身の中井龜助（厚沢、一七七八〜一八三三）が長崎遊学からの帰路、中津を訪れた。厚沢は以前広島で師・星野良悦の木製骨格模型を見たことがあり、江戸で大槻玄沢の門下生として桂川甫周、杉田玄白などとも親交のある顔の広い蘭方医であった。彼は吉雄耕牛の門下にも従遊し、水銀系薬品に関する「升汞丹製法秘訣」を執筆した³⁸ことと、稲村三伯の『江戸ハルマ』の増補版を出版した³⁹ことで知られている。厚沢は玄水に西洋の「内景方説」（解剖学）について語り、多大な影響を与えたようだ。その時点で、玄水はようやく家督を継ぎ、医業の道へ進む決心をする³⁹。

現存資料が示す長崎遊学の最古の事例は、上述した平田道巴の父・平田長太夫である。一六六〇年代中頃には出島オランダ商館医と接触するには長崎奉行および出島商館長の許可が必要であり、長太夫には強力な支援があったと思われる。一七世紀後半から代々にわたって商館医の教えを通訳したり、奉行などの高級官吏のためにそれに関する報告書をまとめた通詞家の一部は、後に私塾で紅毛人の医学を教えるようになった。とりわけ本木家、榎林家および吉雄家が所有していた医書、医療道具、治療薬、単語帳、抜粋、報告の写しなどは、全国各地からの注目を集めた。

医業を目指す若き藩士の一部には、医学だけにとどまらずより広い博学的な教授を求める者もいた。村上玄水の息子春海は、家督となった文政七

た。多くの場合、身分が高く顔の広い藩主の後押しが必要だった。中津関連で、一七世紀の唯一の成功例は上述した平田長太夫である。彼の指導を担当したのは、一六六五年一〇月より二年間出島で勤務していた下位外科医ライエン (Cornelisz de Layen) と翌年一〇月から、病で亡くなる一六六九年一月九日まで上位外科医を務めていたディルクス (Arnout Dirksz) だった。一連の写本が示すように、ディルクスは多くの「弟子」に骨折と脱臼の手当て、創の縫合法、瀉血法および数々の膏薬方を紹介し、初期紅毛流外科の普及に大いに貢献した⁴⁵。

京都の典薬大允・荻野元凱、桂川甫周、中川淳庵など江戸の蘭学者と親交のあったスウェーデンの植物学者・ツンベルク (Carl Peter Thunberg 一七四三～一八二八⁴⁶) の在日期间中に、耶馬溪の屋形諸文が長崎の吉雄耕牛の塾で学んでおり、その際作製した写本「雑書」の表紙裏面に「カアレヒイトル トインベロク」の記載があるが⁴⁷、大通詞吉雄耕牛が地方出身の一介の門下生を同伴者として商館に連れて行ったことは考えにくい。

歴代出島商館医の行動範囲は著しく制限されていたが、一八二三年に來日したフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト (Philipp Franz von Siebold 一七九六～一八六六) は、オランダ商館の外で私塾兼診療所の開設を許された。ここで医学や自然科学を学んだ門弟は五〇人以上に及んだ。文政六「一八二二」年から長崎に住んでいた村上玄水は、シーボルトとも面識があったと思われる。というのはシーボルトが文政九「一八二六」年二月、商館長デ・スチューレルとともに江戸へ発った際、玄水は一行とともに小倉まで随行し、小倉から中津へ戻っているからである。また、玄水が三年後に中津の「善地堂」で写した「矢以勃見杜駿方録」も彼のシーボルトに対する強い関心を物語っている⁴⁸。しかし、シーボルトと

最も親しく交流していたのは、後世に「蘭癖大名」と呼ばれた奥平家九代昌高 (一七八一～一八五五) だった。昌高公は、拔群のオランダ語力を持った家臣・神谷弘孝とともにシーボルトの名著『NIPPON』に登場しており、二冊の辞書⁴⁹の刊行で日本の蘭学史に大きな功績を残した⁵⁰。

「長崎遊学」の収穫は、西洋医学と医術の修得だけではなく、植林家、吉雄家などの家塾で新しい知識を吸収し、様々な資料を写しながら、全国各地から集まった門弟同士の交流により、研究課題、研究方法、専門的概念などを共有する一種のパラダイムが形成されていた。またそこで培われた人脈は、帰郷後も続けられる学習の内容と質に大きな影響を与えた。

長崎海軍伝習所 (一八五五年) および医学伝習所 (一八五七年) の設立後は「遊学」の性質が根本的に変わった。初代教授を務めたオランダ軍医ポンペ・ファン・メーデルフォールト (Johannes Lydius Catharinus Pompe van Meerdervoort 一八二九～一九〇八) は、物理学、化学などの自然科学に基づく体系的な医学教育を導入し、従来の伝承形式を覆す教育体制を目指した⁵¹。これにより、知と技能は飛躍的に均一化され、伝授と学習は「discipline」(規律訓練)として実施されるようになった。

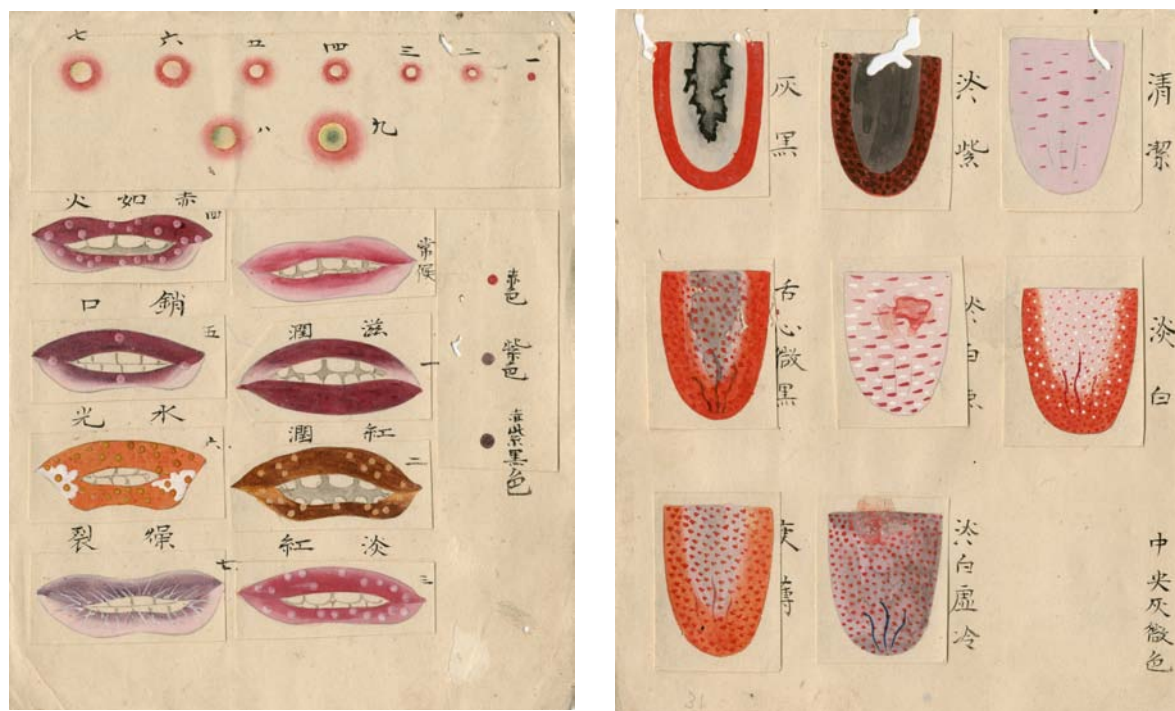
この「異質」の体験が及ぼした影響は大きかった。ポンペの後任として長崎養生所の教頭となったユトレヒト陸軍軍医学校教官ボードウィン (Anthonius Franciscus Bauduin 一八二〇～一八八五) の生徒に、町医者藤野東海の息子玄洋 (一八四〇～一八八七) がいた。明治四年 (一八七二) に大江雲沢、藤野玄洋らが、小倉県知事小幡高政に中津医学学校兼附属病院の設立を建議し、一八七三年に開設された中津医学学校の校長は鷹匠町の大江雲沢、教頭は京町の大江春水、附属病院の院長は藤野玄洋であった⁵²。

伝染病の流行と医療の組織化

近世以前の日本で「流行病」として特に恐れられたのは「疱瘡」（天然痘）、「麻疹」および「水疱瘡」だった。人々は、突然姿を現し急激に広まる病気を擬神化し、養生法や呪術によりこれらの疫病神から身を守り、退治しようとしていた。中津の白鬚神社には痘瘡神として御神札が領布された記録が残っている。一八五七年から五年間長崎で医学教授を務めたポンペは「日本ほど痘瘡のある人が多い国はない。住民の三分の一は痘痕があるといつてよい」と書いている⁵³。

中国から伝わった予防接種の発想は、比較的早く日本に根付いた。筑前国秋月藩八代藩主黒田長舒に召し抱えられた藩医・緒方春朔（一七四八～一八一〇）は、清の臨床医書『医宗金鑑』（九〇巻、一七四九年刊⁵⁴）を基に天然痘患者から採取した膿を使った「人痘法」を研究し、その成果を秘伝とせず『種痘必順弁』（寛政五「一七九三」年刊）として発表した⁵⁵。春朔の鼻早苗法を学ぶ門弟は全国各地から集まったが、中津地方からの人物は確認できていない。

一八二三年に出島商館に着任したシーボルトは、バタビアからの牛痘苗で接種を試みたが失敗に終わった。後任者のリシユールも成功しなかった。一六四八年に来日したモーニケ（Otto Gottlieb Johann Mohnike、一八一四～一八八七）の痘苗も約三週間に及ぶ公開で腐敗してしまった。その後バタビアから届いた牛痘痂でようやく成果をあげることができた。モーニケは、長崎の阿蘭陀通詞会所に伝習所兼種痘所を置き、阿蘭陀通詞吉雄圭斎、長崎在住の佐賀藩医榎林宗建、長崎遊学中の水戸藩医柴田方庵などの協力を得て、一六四九年末までに三九一人に接種し成功した。すでに人痘接種を知っており、牛痘接種に関する情報も以前から入手していた医



図一〇 辛島医家に伝えた池田流「痘瘡唇舌鑑図」より（中津市歴史民俗資料館蔵）

師は、より安全な牛痘接種に飛びついた。

中津藩で代々藩医を務めてきた辛島家の第五代辛島正庵蔵春（一七七九～一八五七）は、長男の章司を六歳の時に痘瘡で亡くし、それを契機に痘瘡の研究に取り組んだ。天保一「一八四〇」年、養子の六代目長徳を岩国の中村一安の所に送り、明の僧侶戴曼公たいまんこうが周防岩国城主吉川家の家臣池田正直まことに伝えた治痘法を学ばせた⁵⁶。承応二「一六五三」年に来日した戴曼公（独立性易、一五九六～一六七二）は、唇と舌の色、形状などに基づく緻密な分類法およびそれぞれの病態に適した薬品を紹介した⁵⁷。この「池田流」治痘法は、一九世紀に入ってから幅広く普及していた⁵⁸。

中津地方においては痘瘡研究に力を注いだ辛島医家が、モーニケが持っていた痘苗の有用性をいち早く理解した。七代目春帆（一八一八～一八五九）は、早々に西周哲、横井玄伯、神尾雄策、藤野東海（啓庵）、藤本玄泰、小幡竜洲、松川清庵、原岡平泉、久松方庵の九人の医師とともに子供たちを長崎に連れていき、種痘を行なった⁵⁹。同年一二月、神尾雄策と藤野東海が、第八代藩主奥平昌服に種痘許可を求める請願状を提出した⁶⁰。

従来の医療は医師と患者との個人的な関係において行われてきたが、多数の健康な庶民に痘苗を接種することは、その枠を越える公共性の高い行為となる。また、完全には除外できない健康被害が発生した場合、地元社会に不安が広がるおそれがあるため、幅広い啓蒙活動および安定的な実施体制が不可欠である。牛痘接種の普及に伴い、地域における医療の組織化は避けて通れない課題となった。

藩民が支えた中津医学館の開設

一八世紀後半から、医学教育は藩の政策の一環として行なわれるように

なった。多くの藩は、藩校の中で医学を教えていたが、九州では独立した医師養成所を創設した藩が比較的多かった。

熊本藩	再春館	宝暦六年（一七五六年）
薩摩藩	医学院	安永三年（一七七四年）
豊後・岡藩	博済館	天明七年（一七八七年）
佐賀藩	好生館	天保五年（一八三四年）
府内藩	稽全館	安政元年（一八五四年）
中津藩	医学館	文久元年（一八六一年）
福岡藩	賛生館	慶応三年（一八六七年）

多くの藩と同様に中津藩は常に財政問題に悩まされていた。参勤交代や自然災害およびそれに伴う飢饉が藩民に重くのしかかったが、宝暦年間から数回にわたって打ち出された一連の対策は失敗に終わった。中津医学館が開設された文久元年頃、藩には藩校進脩館に加えて新しい教育施設を設立する余裕はなかった⁶¹。

文久元「一八六一」年正月、地元の医師村上玄秀、西千枝、神尾雄朔、藤野東海（啓庵）、藤本玄岱⁶²、原岡平泉、久松方庵らが種痘を行なったが、あらためて種痘の重要性を認識した藩は、その直後に町医師藤野啓山を医学館普請の御用掛に任じた。

「藤野啓山

医学館御普請^{三付}御用掛^り被^り 仰付候、

正月十八日」⁶³

藤野啓山は福澤諭吉の『福翁百余話』にオランダ語が少しできる医師として登場している⁶⁴。同月末、豪商小幡省吾ら四人は医学館建設の世話方

に任命された。

「正月廿八日

一、医学館御普請世話方、表立被 仰渡候^{ニ者}無之候へ共左之人頭へ申付候様御沙汰^ニ相成候間、呼出氏申渡^ス

省吾殿所へ者手紙^{ニ而}沙汰致^ス

小幡省吾・能勢源右衛門・播磨

屋徳右衛門・濱田屋与兵衛

支配分申し渡候様清輔殿へ伝ル⁶⁵

二月に入ると、村屋久右衛門が月番町年寄井上与三兵衛に献金を申し出る。

「乍恐ーー」

一、私義、数年御羽根下^ニ住居仕、御陰を以渡世相統仕難有仕合奉存候、猶又先年来植疱瘡被 仰付、子供之第一難病等相遁^レ 御国恩之程重々難有仕合奉存候、然^ル处此節医学館御建立^ニ相成候趣奉承知候、依之聊為御冥加銀、右御普請用之内金五拾両、献上仕度奉願候、右願之通被 仰付被下置候ハ、難有奉存候、此段宜敷被 仰上可被下候 已上
酉二月 月番町年寄井上与三兵衛殿 二月七日願之通被仰付候、 二月十五日上納相済 村屋久右衛門⁶⁶

久右衛門によれば、人々を疱瘡の病難から救うために医師たちが数年前から子供に種痘を接種しており、恩返しとして計画中の医学館のために、金五〇両を献上するつもりであるとのことだった。そもそも、痘瘡が発生しない限り、予防接種の効果を確認することはできないが、藩民は牛痘接

種の有用性を十分に理解できたようだ。同じ二月に小松屋兵衛、国崎屋長兵、鍋屋久三郎、組内藤吉、塩屋藤右衛門、兵庫屋利兵衛らがそれぞれ町年寄に宛てたほぼ同様の「口上之覚」において医学館創設に対する協力を表明している⁶⁷。また、医学館の門のための瓦、扉、松丸太、囲垣、石垣、葛石^{かづいし}などの建築材料も提供された⁶⁸。

「乍恐ーー」

一、私義、医学館御普請御世話被 仰付冥加至極難有仕合^ニ奉存候、就右^ニ萬叟御為筋^ニ相成候様^{ニ与}立廻り相勤、何^与御用立品物兼^而献上仕度存意罷在候處、御積^りも仕候儀^ニ御座候へ者、聊之義^ニ御座候へ共、御玄関葛石献上仕度奉存候間、奉願上候通被 仰付下置候ハ、難有仕合^ニ奉存候、此段宜敷被 仰上可被下候、以上
西六月 町年寄衛藤清輔殿 十月朔日^ニ出^ニ 十一月朔日願之通被 仰付候 古博多町江本屋利兵衛⁶⁹

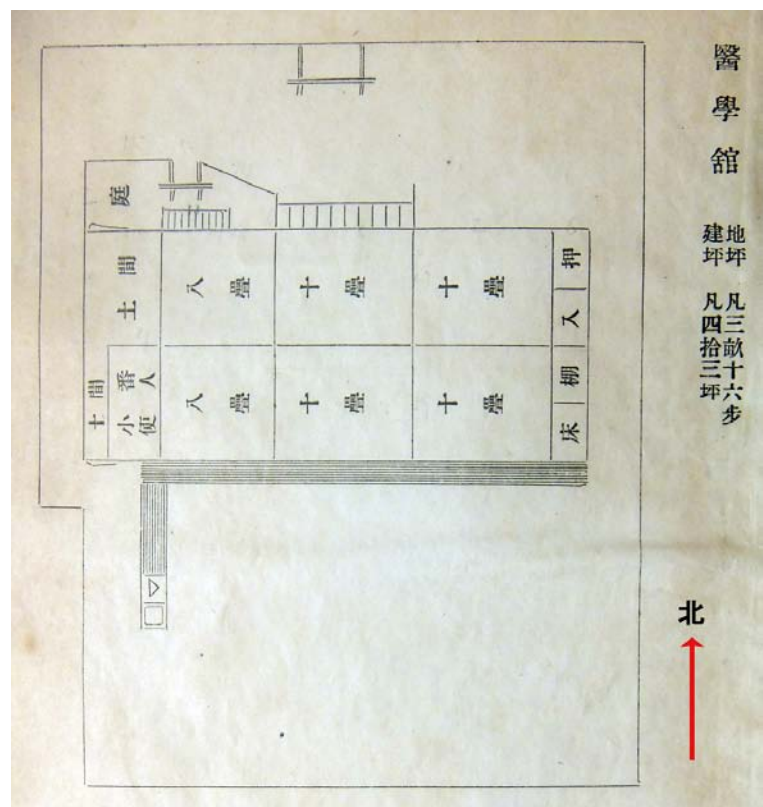
「惣町大帳」には、万延二年二月から文久元年十一月（一八六一年三月（一二月）にかけて、このような活動に関する記述が見られる⁷⁰。享保元「二七一六」年創業の醤油醸造元「室屋」菊池家が中津市立小幡記念図書館蔵に寄贈した「市令録」にもこのような資金、米、囲垣石、玄関石などの寄付が記録されている⁷¹。豪商菊池をはじめ、献金者の殆どは商人だった。

村屋久右衛門	金五拾両
船町 鍋屋久三郎、組内藤吉	金参拾両
塩屋藤左衛門	金参拾両



図一 「中津城旧地図」に見られる医学館（中津市築家旧蔵、大分県立先哲史料館蔵）

- | | | | | | | |
|---------|-------|-------|--------------|-------------|-------|-------|
| 兵庫屋利兵衛 | 有宗半兵衛 | 有宗半兵衛 | 有宗半兵衛名義三男久平衛 | 室屋久衛間、菊池安之蒸 | 茶屋弥兵衛 | 国崎屋長平 |
| 銀札貳貫五百匁 | 金壹拾兩 | 金貳拾兩 | 金貳拾兩 | 金貳拾兩 | 金貳拾兩 | 金貳拾兩 |



図一二 中津医学館の見取図（『藩政時代の教育』より）

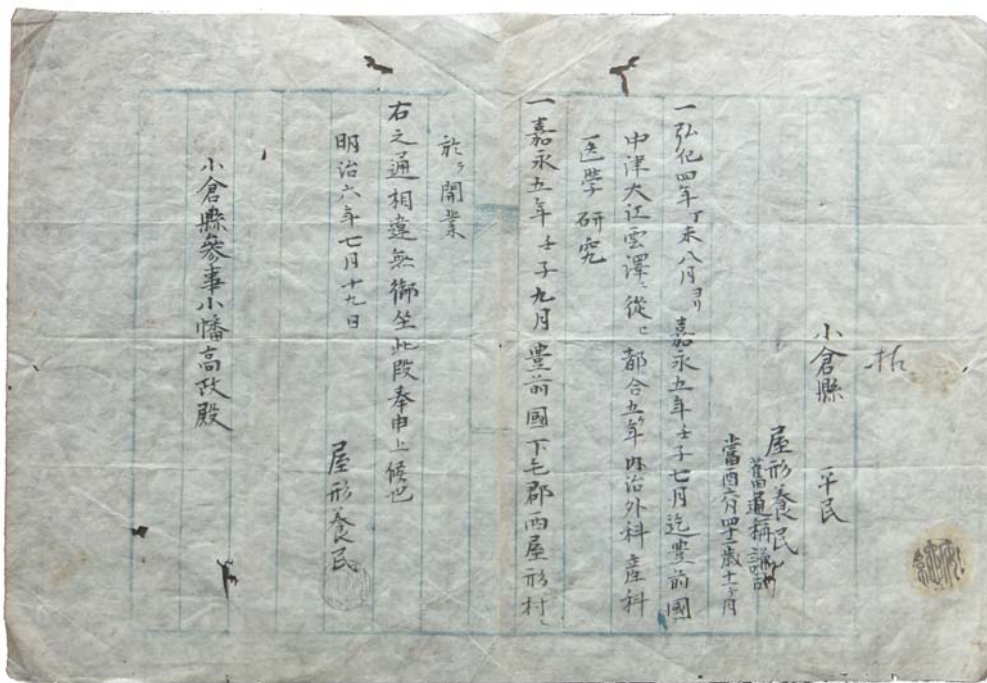
冒頭に述べた藩民の高い教育水準、医師たちの啓蒙活動ならびに商人層の奉仕精神が民間の医学館設立運動につながった。

医学館は、城下町の南部にあった上勢溜せいだまに建設されることになった。その隣には町奉行、郡奉行、目付のために設置された「三役所」があった⁷²。

一八世紀に創設された医師養成所では、和漢医学が教授されたが、幕末頃になると西洋医学が飛躍的に広まった。激しい時代の変化にさらされる江戸で、中津藩は素早い反応を見せる。医学館開設の三年前に下級藩士福澤諭吉が藩命を受け緒方洪庵の適塾から江戸へ戻り、中津藩中屋敷に塾を開いた。当初は蘭学の普及を目指したが、その翌年横浜でオランダ語の限界を痛感し、英学に目を向けるようになった。万延元「一八六〇」年咸臨丸に艦長の従僕として乗り込み渡米し、文久二「一八六二」年には遣欧使節団の探索方としてフランス、イギリス、オランダ、ドイツ、ロシア、ポルトガルを歴訪した諭吉は、従来の蘭学を洋学に広げ、藩を越えた近代化の思想を唱えた。

ジェンナー (Edward Jenner, 一七四九〜一八二三) の牛痘接種を受け入れた中津の医師が西洋医学に関心を寄せたのは当然のことと思われるが、残念ながら、施設の運営管理や教育の詳細に関する資料は残っていない。藩内の医学教育を概観する『藩政時代の教育』(一九二五年)によれば、医学館は医学を志す若者だけでなく、ベテラン医師の学習の場でもあったが、養成課程の設置には至らなかった。

「医学研究ノ事ハ旧藩主ニ於テ夙ク注意セラレ寺院等ニ医院集會シ会読等アリシモ時來ラスシテ学校設立等ノ挙アルニ至ラス已ニ解剖ノ事アリシモ即長濱ニ於テセリ距今二十三四年「万延文久ノ時代」江三竹町二校舎ヲ新築シ医生老少ヲ論セス漢洋各其書ヲ講シ其理其術ヲ研究ス然レトモ未タ課程ヲ設クルニイタラス廢藩前三ノ町ニ転シ暫クシテ廢校」⁷³



図一三 屋形養民による医学修行に関する説明 (中津市歴史民俗資料館蔵)

い。春水は、メイエル『語彙宝函』⁷⁶の外來語の部を翻訳し『バスタールド辞書』（一八二二年）として出版した御典医・大江春塘（一七八七〜一八四四）の子である⁷⁷。春水がどのような医学教育を受けたかは不明であるが、父春塘は、オランダ商館長ブロムホフ（Jan Cock Blomhoff）よりルネサンス医学の巨匠バラケルススを思わせる蘭名（Jacobus Paracelsus）を授けられるなど優秀で⁷⁸、難易度の高い専門的な辞典を編纂できるほどの人物であったことから、跡継ぎの春水も若い頃から蘭学を志したと思われる。

自然科学に基づく体系的な医学教育が求められる新しい時代に、町医・藤野東海の息子玄洋（一八四〇〜一八八七）は最適な人材だった⁷⁹。玄洋は牛痘接種の普及に貢献し、医学館普請の御用掛を務めた藤野東海（啓山、啓庵）の子である。安政二「一八五五」年二月から日田の咸宜園で漢学を学んだ後、安政五「一八五八」年二月、大坂の適塾に入門し、約四年間蘭学の勉強に励んだ。こうして漢学と蘭学の基礎を固めた上で、玄洋は安政四年に設立された長崎医学伝習所に学んだ。当時、初代教授ボンベはすでに帰国し、後任として、オランダ人陸軍軍医アントニウス・ボードインが教鞭を執っていた。長崎遊学後の玄洋の行動はまだ十分に確認されていないが、明治二「一八七〇」年には、中津に戻って開業し、明治六「一八七三」年に中津医学学校附属病院の院長に就任した。

十分な教育を受け、行動力もある藤野玄洋は価値ある人材だったと思われるが、中津医学学校の運営がある程度軌道に乗ったところで、玄洋の関心は再び外へ向かった。玄洋は明治九「一八七六」年に、佐野備達らとともに大分医学学校の設立建白書を大分県の権参事に提出した。病院長兼校長・鳥潟恒吉が明治十六年に発表した『大分県立病院兼医学学校第一次報告』は

当時の動きを次のようにまとめている。

「明治九年

- 一、病院兼医学学校設立ノ儀ヲ立テラル
- 一、十二月県下開業医佐野備達藤野玄洋宇都宮徠田吹玄珠下瀬文蔵ノ五名ヲ県庁ニ召集シ院校設立ノ方法順序ヲ諮問セラル
- 一、同月本県権中属桑原深造及ビ医員藤野玄洋ヲ東京ニ派遣シ教師雇入及器械購求ノ事ヲ処弁セシメラルトイエドモ事故アリテ果サス

明治十年

- 一、西南ノ変アリ、院校設立ノ事、為メニ沮擱セリ⁸⁰

激動の時代に各地を渡り歩いてきた玄洋は、中津に収まりきれなかったのかもしれない。西南戦争が終わった明治一二「一八七九」年、大分県議会で設立が可決され、翌十三年に大分医学学校が設立された。しかし玄洋はすでに明治一〇年に下関に移住し、阿弥陀寺町の「月波楼医院」で開業していた⁸¹。

医学学校の運営については詳しいことはわからない。鷹匠町大江家に医学学校の蔵書印付きの教科書が残っている。『病学通論』は緒方洪庵が訳して嘉永二年に京都で刊行した日本初の病理学書である。『化学入門』はフランス人化学者ジラルダン（Jean Pierre Louis Girardin, 一八〇三〜一八八四）やドイツ人化学者フレゼニウス（Carl Remigius Fresenius, 一八一八〜一八九七）の著書を基に編集された教科書である⁸²。『気海観瀾広義』は日本で最初の物理書『気海観瀾』（青地林宗著）をわかりやすくした増補版である⁸³。

医学学校のために尽力した大江雲澤らの使命感は賞賛に値するが、やがて

医学教育と医療を取り巻く環境の急激な変化に対応できなくなった。明治七「一八七四」年に、政府は医師の資格、試験制度、医学校、病院などに関する規定を定めた「医制」を發布し、その五年後には、医師資格試験の試験科目は完全に西洋医学だけになった。中津医学校はおそらく明治七「二八七四」年には、教材、教員、建物維持などのための経費を賄えなくなっていた。大江雲澤の息子億司（一八六四～一九一九）は、明治十三「二八八〇」年三月一日に大分市高砂町に開設された「大分県立医学校」の第二回生徒募集時に入学することになった⁸⁴。しかし億司がこの学校を卒業した明治一九「一九八六」年の翌年、勅令により府県立医学校の費用を地方税から支弁することが禁止され、明治二一「一八八八」年三月には数々の難問に取り組みながら何とか運営されてきたこの県立医学校もまた廃校となったのである。

おわりに

地政学的にみると、中津地方は恵まれていたとはいえない。薩摩、対馬、佐賀、福岡の各藩や直轄地長崎のように必然的に外の世界が視野に入る環境ではなく、豊富な資源や肥沃な農地があって藩民が余裕を持って文化活動と学業に没頭できたわけでもない。自然災害と政策の失敗によって慢性的財政難に悩まされた中津藩は、医学教育と医療の制度化を進める余力がなかった。また、蘭学に強い関心を寄せ、画期的な辞書で功績を残した奥平昌高は、シーボルトら西洋人との親交によりさまざまな知識と刺激を受けたが、それを藩の財政改革に活かそうとした様子は見られない。

イニシアティブを取ったのは、むしろ藩士と商人だった。藩民の長崎遊学や江戸・大阪の中津藩屋敷が果たした役割も大きかった。ここでは中津

では得られない情報を入手でき、全国各地からやって来る異郷の人々との交流により、自身の位置づけや世界観が一層明白になる。前野良沢と昌高の蘭学が結実したのも、福沢諭吉が慶應義塾の基となる蘭学塾を創設したのも、築地鉄砲洲の中屋敷だった。

医学館の設立における藩民の貢献は前例のないことだった。牛痘接種を広めようとする医師たちの啓蒙活動とともに、寺子屋、私塾、藩校で高度な教育を受けた民衆の理解力と奉仕精神が新しい時代を切り開く原動力となった。その延長線上にある明治初期の中津医学校は厳しさを増す国の規制や運営経費の問題で行き詰まってしまったが、中津はその後も広い視野と行動力を持つ人材を輩出し続けた。

参考文献

- ・相川忠臣（二〇〇九） 相川忠臣「ボンペ・ファン・メルデルフォールト近代西洋医学教育の父」。『九州の蘭学』、三〇三～三二〇頁
- ・赤松文二郎（一九七四） 赤松文二郎編『扇城遺聞 郡誌後材』、東京…名著出版、一九七四年（復刻版）
- ・荒巻逸夫（一九八九） 荒巻逸夫『歴史のなかの医学―府内の医療史』、『荒巻逸夫』、一九八九年
- ・青木歳幸（一九九八） 青木歳幸『在村蘭学の研究』、京都…思文閣、一九九八年
- ・青木歳幸（一九九八） 一種痘法普及にみる在来知。『佐賀大学地域学歴史文化研究センター・研究紀要』第七号、二〇一三、一～二二頁
- ・生田重倫（一九七三） 生田重倫編集『奥平藩臣略譜集録』、（謄写版）、[出版地不明]、一九七三年
- ・石原力（二〇〇三） 石原力「中津藩医山辺文伯と産育編について」。『日本医史学雑誌』第四九卷第一号、二〇〇三年、一〇二頁
- ・泉亀吉（一八八六年） 泉 亀吉編『大分県下名所商家独案内記』、大阪…竜陽社、明治十九年。（復刻版。中津…川原田印刷所）

- ・今井正樹（一九八二）『今井正樹「医亦従自然也」 村上医家事歴史』、中津・村上記念病院・村上医家史料館、一九八二年
- ・今永清二（一九八〇）『今永清二編「中津の歴史」、中津・中津市刊行会、一九八〇年』
- ・海原亮（二〇一四）『江戸時代の医師修行 学問・学統・遊学』、東京吉川弘文館、二〇一四年（歴史文化ライブラリー三八九）
- ・梅崎大夢（一九九九）『梅崎大夢「雑録春帆楼」、北九州・春帆楼、一九九九年』
- ・大分県教育百年史（一九七六）『大分県教育百年史 第一巻通史編』、大分県教育委員会、一九七六年、四九～五三頁
- ・大分県史 近世篇Ⅳ（一九九〇）『大分県総務部総務課編「大分県史 近世篇Ⅳ」大分県、一九九〇年』
- ・大分県立病院兼医学校大一次報告 鳥潟恒吉編纂『自明治十三年至明治十六年大分県立病院兼医学校大一次報告』大分・鳥潟恒吉、一八八三年
- ・大島明秀（二〇〇八）『大島明秀「屋形家史料に見る倉成龍渚の講義」写本「外療内治法」を中心に』、『史料と人物Ⅰ』（中津歴史民俗資料館分館医家史料館資料叢書Ⅷ）中津、二〇〇八年、七～三〇頁
- ・大島明秀（二〇一〇）『大島明秀「一九世紀後半中津における医師大江雲澤の「門人帳」について」』。W・ミヒエル、吉田洋一、大島明秀共編『人物と交流Ⅱ』（中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書Ⅹ）、中津・中津市教育委員会、三二～四七頁
- ・鹿毛基生（一九八四）『大分県の教育史』、京都・思文閣出版、一九八四年
- ・家臣人名事典（一九八九）『家臣人名事典編纂委員会「三百藩家臣人名事典七」』、東京・新人物往来社、一九八九年
- ・辛島詢士（一九七九）『辛島詢士「中津辞書の穿鑿」』『ピブリア』（天理図書館報）、第四四号、一九七九年
- ・川島真人（一九九二）『川島真人「蘭学の泉中津に湧く」、西日本臨床医学研究所、一九九二年』
- ・川島真人（一九九二）『川島真人「医は不人の術、務めて仁をなさんと欲す」中津・西日本臨床医学研究所、一九九二年』
- ・川島真人（二〇〇二）『川島真人「中津医学校と中津藩蘭学」』。片桐一男編『日蘭

- 交流史 その人・物・情報』、京都・思文閣出版、二〇〇二年、七六～九五頁
- ・川島真人（二〇〇六）『川島真人「水滴は岩をも穿つ」、福岡・梓書院、二〇〇六年』
- ・川島真人（二〇〇九）『川島真人「辛島正庵―種痘に生涯をかけた医師たち」』、『九州の蘭学』、一三八～一四三頁
- ・川島真人（二〇〇九B）『藤野玄洋―大分県医療史上の先覚者』、『九州の蘭学』、三四五～三五二頁
- ・河野福夫（一九三九）『河野福夫「中津奥平侯の参勤交代（上）」』、『中津史談』、第一巻第二号、一九三九年
- ・神戸輝夫（二〇一三）『神戸輝夫「中津藩の儒者藤田敬所について」』大分大学経済論集、第六三巻第五・六号、二〇一二年
- ・九州の蘭学（二〇〇九）『ヴォルフガング・ミヒエル、鳥井裕美子、川島真人編「九州の蘭学―越境と交流」』、京都・思文閣出版、二〇〇九年
- ・沓沢宣賢（二〇〇四）『沓沢宣賢「シールボルトと日本医学―村上玄水写本」』矢以勃児杜験方録を中心に』、『村上玄水資料Ⅱ』（中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館資料叢書Ⅱ）、二〇〇四年
- ・黒屋直房（一九四〇）『黒屋直房「中津藩史」、東京・碧雲荘、一九四〇年』
- ・下毛郡誌（一九二七）『大分県下毛郡教育会編「下毛郡誌」、中津・大分県下毛郡教育会、一九二七年（複製版、東京・名著出版、一九七二年）』
- ・小久保明浩（一九八四）『塾の構造―中津藩の塾を中心に』、『講座 日本教育史』第二巻（近世Ⅰ・Ⅱ・近代Ⅰ）、東京・第一法規出版、一九八四年
- ・坂井建雄（二〇一三）『坂井建雄編「日本医学教育史」、仙台・東北大学出版会、二〇一二年』
- ・下毛郡誌（一九二七）『下毛郡教育会編「下毛郡誌」、中津・大分県下毛郡教育会、一九二七年』
- ・高浦照明（一九七八）『高浦照明「大分の医療史」、大分・大分合同新聞社、一九七八年』
- ・高浦照明（一九八〇）『高浦照明編「風雪の一世紀 大分県立病院百年史」、大分・大分県立病院、一九八〇年』
- ・童子問（一九七〇）『伊藤仁斎著「童子問」、宝永四（一七〇七）年刊』

- ・富田修司(二〇〇八) 富田修司「耶馬溪屋形家とその資料について」。W・ミヒエル、大島明秀、吉田洋一「耶馬溪屋形家の系譜」『史料と人物Ⅰ』(中津歴史民俗資料館分館医家史料館資料叢書Ⅷ)、中津、二〇〇八年、一～六頁
- ・富田英壽(二〇一〇) 富田英壽『天然痘予防に挑んだ秋月藩医緒方春朔』、福岡・海鳥社、二〇一〇年
- ・鳥井裕美子(二〇〇九) 鳥井裕美子「福澤諭吉―蘭学を洋学に開化させた啓蒙思想家」。『九州の蘭学―越境と交流』、三五二～三五九頁
- ・中津市史(一九六五) 中津市史刊行会編『中津市史』、中津・中津市史刊行会、一九六五年
- ・「中津城跡二」(二〇〇二) 中津市教育委員会編『中津城跡二』(中津市文化材調査報告第五三集) 中津・二〇一一年
- ・中津藩 歴史と風土 半田隆夫校訂・解説『中津藩 歴史と風土』(中津藩史料叢書 第一～十八輯)、中津市立小幡記念図書館、一九八一～一九九八年
- ・中山 沃(一九八九) 中山沃「蘭学を学んだ岡山の医師群像」。吉備洋学資料研究会編『洋学資料による日本文化史の研究Ⅱ』、岡山大学、一九八九年、一四～一五頁
- ・西澤直子(一九九四) 西澤直子「奥平家の資産運用と福澤諭吉」『近代日本研究』第十一卷、一九九四、一九七～二〇〇頁
- ・日本教育史資料 文部省総務局課編『日本教育史資料』一～十、文部省総務局、一九九〇～一九九二年
- ・藩政時代の教育(一九二五) 大分県社会課『藩政時代の教育』、大分・大分県社会課、一九二五年(大分県立図書館蔵)
- ・広池千九郎(一九九一) 広池千九郎編述『中津歴史』(大分県) 鶴居村・広池千九郎、一九九一年(複製版)。下関・防長史料出版社、一九七六年
- ・「福翁百余話」(一九〇二) 福沢諭吉『福翁百余話』、東京・時事新報社、一九〇二年
- ・「豊前中津田信伝」 有角りえ子、浜砂敦編『豊前中津田信伝』中津大神宮、二〇〇〇年
- ・細田富多(二〇〇七) 細田富多「大江医家史料館の文書史料より(一)」。ミヒエル・ヴォルフガング編『中津市歴史民俗資料館 分館医家史料館叢書Ⅵ』、二〇〇七年、八六～九〇頁
- ・細田富多(二〇一〇) 細田富多「大分県立医学校と大江家」。ミヒエル・ヴォルフガング編『人物と交流Ⅱ』(中津市歴史民俗資料館 分館村上医家史料館資料叢書Ⅹ)、中津、二〇一〇年、四八～六二頁
- ・細田富多(二〇一一) 細田富多「中津の辛島医家に伝えた池田流「痘瘡唇舌鑑」」。W・ミヒエル・吉田洋一・大島明秀共編『史料と人物Ⅲ』(中津市歴史民俗資料館 分館医家史料館叢書Ⅹ)、中津、二〇一一年、八八～一〇五頁
- ・ミヒエル(二〇〇三) ミヒエル・ヴォルフガング「村上玄水の略歴」。『村上玄水資料Ⅰ』(中津市歴史民俗資料館 分館村上医家史料館資料叢書Ⅰ)、中津教育委員会、中津、二〇〇三年、一～六頁
- ・ミヒエル(二〇〇六) ミヒエル・ヴォルフガング「中津藩主奥平昌高と西洋人との交流について」。ミヒエル・ヴォルフガング編『人物と交流Ⅰ』(中津市歴史民俗資料館 分館村上医家史料館資料叢書Ⅴ)、中津、二〇〇六年、二〇～六一頁
- ・ミヒエル(二〇〇七) ミヒエル・ヴォルフガング「中津藩医大江春塘について」『中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書Ⅵ』中津、二〇〇七年、五八～七七頁
- ・ミヒエル(二〇〇七B) ミヒエル・ヴォルフガング「東西の古医書に見られる病と治療」。福岡・九州大学図書館、二〇〇七年(展覧会図録)
- ・ミヒエル・大島・吉田(二〇〇九) ミヒエル・ヴォルフガング、大島明秀、吉田洋一「耶馬溪屋形家の系譜」。『史料と人物Ⅱ』(中津歴史民俗資料館分館医家史料館資料叢書Ⅷ)、中津、二〇〇九年、一～一〇頁
- ・ミヒエル(二〇一一) ミヒエル・ヴォルフガング「平田長太夫の阿蘭陀流外科修業証書とその背景について」。W・ミヒエル・吉田洋一・大島明秀共編『史料と人物Ⅲ』(中津市歴史民俗資料館 分館医家史料館叢書Ⅹ)、中津、二〇一一年、一～三八頁
- ・ミヒエル(二〇一三) ミヒエル・ヴォルフガング「大江億司写「動脈一覽図」とその背景について」。W・ミヒエル・吉田洋一・大島明秀共編『史料と人物Ⅴ』(中津市歴史民俗資料館 分館医家史料館叢書Ⅻ)、中津、二〇一三年、六二～八四頁

- ・ミヒエル(二〇一三二) ミヒエル・ヴォルフガング「吉松文治訳纂『診断図説』(明治十二年刊)と大江億司写「診断図説 図譜」について」。W・ミヒエル・吉田洋一・大島明秀共編『史料と人物Ⅴ』(中津市歴史民俗資料館 分館医家史料館叢書Ⅻ)、中津、二〇一三年、八五～一〇九頁
- ・明治前日本医学史 日本学士院日本科学史刊行会編『明治前日本医学史』、日本古医学資料センター、井上書店(発売)、一九七八年(第一巻より五巻)
- ・本耶馬溪町史(一九八七) 本耶馬溪町史刊行会編『本耶馬溪町史』、本耶馬溪町、一九八七年
- ・山崎有信(一九三九) 山崎有信『豊前人物志』、東京・国書刊行会、一九三九年(復刻版、美夜古文化懇話会『豊前人物誌』行橋、美夜古文化懇話会、一九七三年)
- ・吉田 忠(二〇〇九) 吉田忠「帆足万里―漢蘭折衷を説く儒家」、『九州の蘭学』、二二八～二二三頁
- ・吉田洋一(二〇〇六) 吉田洋一「村上玄水の参勤随行記」。W・ミヒエル編『人物と交流Ⅰ』(中津市歴史民俗資料館 分館村上医家史料館資料叢書Ⅴ)、中津、二〇〇六年、一～一九
- ・梁嶸(二〇〇八) 梁嶸「中日伝統医学の舌診―相違点の背景」。『漢方の臨床』第五五巻第二号、二〇〇八年、二四五～二五二頁
- ・列藩学政 鹽谷世弘「列藩学政」。「製作者不明」、福岡・九州大学 学部門文庫所収
- ・Michel (1999) Michel, Wolfgang. Von Leipzig nach Japan - Der Chirurg und Handelsmann Caspar Schamberger (1623-1706). München: Indiduum, 1999
- ・Michel (2008) Wolfgang Michel: Japansk läkekunst i teckningar av Clas Fredrik Hornstedt. Christina Granroth (ed.): C. F. Hornstedt, Brev från Batavia - En resa till Ostindien 1782-1786. Stockholm: Bokförlaget Atlantis, June 2008, pp. 117-150.
- ・Pompe (1867/68) J. L. Pompe van Meerdervoort: Vijf jaren in Japan. Leiden: Van den Heuvel & Van Santen, 1867/68

史料

・「奥平藩御家中系図」(中津市立小幡記念図書館蔵)

- ・「御家中系図 文化三年改」(中津市立小幡記念図書館蔵)
- ・「御家中系図 嘉永三年改」(中津市立小幡記念図書館蔵)
- ・「外療内治法」下巻、屋形諸道写、(中津市歴史民俗資料館蔵)
- ・中津藩史料叢書「市令録」第一輯～第三輯、中津、一九七八～一九八〇年
- ・「惣町大帳」後編四二(万延元年正月～同年十二月)、中津市、二〇一一年
- ・「雑書」(内題)、屋形諸道写、(中津市歴史民俗資料館蔵)
- ・平田長太夫の修業証書。「寛文六年陽月吉祥日」成立、(深-water家旧蔵、中津市歴史民俗資料館蔵)
- ・「村上玄水墓碑銘」(原稿、中津市村上医家史料館所蔵)
- ・「門人帳」(仮題)、(無題写本、一八四六～一八八九年、中津市大江医家史料館蔵)
- 大江雲澤宛、奥平昌邁「宛行状」、(一八六八年、中津市大江医家史料館蔵)
- ・Nieuwe-gedrukt bastraardt woorden-boek. Door Ooye Suntoo. Leeftarts van den landsheer Nakats, t' Jedo. 1822.

注

- 1 文書資料は約一一〇〇点
- 2 文書資料約は一五五〇点
- 3 文書資料約は九〇点
- 4 文書資料約は一一〇点
- 5 現時点で確認できたのは、前野東元および前野良沢
- 6 現時点で確認できたのは、藤野玄悦および藤野玄洋のみ
- 7 山辺文伯(産科、中津藩中屋敷か)
- 8 田中田信(一七四八～一八二四)。『豊前中津田信伝』参照
- 9 文書資料約は五〇〇点
- 10 文書資料約は三五点
- 11 とりわけ諸町の村上家と京町の大江家には器物と文書が多数保存されており、その一部は中津市歴史民俗資料館の分館として開設された「村上医家史料館」および「大江医家史料館」で公開されている。
- 12 「市令録」第一輯、九五～九六頁

- 13 「市令録」第一輯、一〇二頁
- 14 今井正樹（一九八二）、一四六～一四七頁
- 15 『明治前日本医学史』第四卷、一四三～一四四頁。石原力（二〇〇三）
- 16 長崎遊学中に手に入れた解剖書『ターヘル・アナトミア』を杉田玄白、中川淳庵、桂川甫周ら盟友とともに三年五ヶ月で翻訳し『解体新書』を編纂した。
- 17 博多町 衛藤源七郎 かめや、新博多町 和漢洋薬種商・医用器械類 森松蔵
- 18 『大分県教育百年史』第一巻、四九～五三頁
- 19 本姓は興津氏。山崎有信（一九三九）、三七八頁
- 20 小久保明浩（一九八四）、一五九頁。山崎有信（一九三九）、三七八頁
- 21 廣池千九郎（一九九二）、五九頁。小久保明浩（一九八四）参照
- 22 藤田敬所について、神戸輝夫（二〇一〇）参照
- 23 廣池千九郎（一九九二）、九四頁
- 24 鹿毛基生（一九八四）、七九頁
- 25 小久保明浩（一九八四）、一六〇～一六一頁
- 26 「列藩学政」（九州大学崎門文庫所収）
- 27 「文武両道ヲ兼修ノ制ナリ文武程度ノ比例無シ」（日本教育史史料 三より）
- 28 孟子・离娄上
- 29 伊藤仁斎著『童子問』上巻、第四三、四五章参照
- 30 川寫真人（一九九二）、一九二頁。川寫真人「辛島正庵―種痘に生涯をかけた医師たち」、『九州の蘭学』、一四〇頁
- 31 平田長太夫の阿蘭陀流外科修業証書とその背景について、ミヒエル（二〇一〇）参照
- 32 中津市立小幡記念図書館蔵
- 33 屋形について、『大分県史料』「宇佐屋形三郎文書」、富田修司（二〇〇八）、ミヒエル・大島・吉田（二〇〇九）参照
- 34 写本「外療内治法」について、大島明秀（二〇〇八）参照
- 35 産科医・賀川玄悦（二七〇〇～一七七七）もその事例の一つになる。
- 36 Michel (1999) 参照
- 37 村上玄水墓碑銘により（中津市、東林寺）
- 38 中井厚沢について、中山沃（一九八九）参照
- 39 村上玄水墓碑銘より（中津市、東林寺）
- 40 帆足万里について、吉田 忠（二〇〇九）参照
- 41 『福翁百餘話』第十六章、六六～六七頁。
- 42 『福翁百餘話』第十六章、六七頁。福沢諭吉の生涯と功績について、鳥井裕美子（二〇〇九）参照
- 43 「合水堂」の入門帳に、中津から来た安部原和泉、大江春亭、大江久、大江忠庵の名も記されている。
- 44 中津市大江医家史料館には、華岡家から大江家に宛てた書簡三通（大江玄明宛 華岡準平書簡一通、大江雲澤宛華岡準平書簡一通、大江雲澤宛華岡良平書簡一通）が所蔵されている。細田富多「大江医家史料館の文書史料より（一）」、八六～九〇頁
- 45 デイルクスの教え子には久留米藩の太田黒玄淡および一六七三年幕府の宗門改め参勤通詞ならびに医官となった西吉兵衛（西玄甫）がいる。ミヒエル（二〇一〇）参照
- 46 Michel (2008) 参照
- 47 中津市歴史民俗資料館蔵（屋形家資料所収）
- 48 ミヒエル（二〇〇三）、沓沢宣賢（二〇〇四）
- 49 『蘭語訳撰』（一八一〇年刊、七〇七二語収録）、『中津バスタード辞書』（一八二二年刊、七二四九語収録）
- 50 奥平昌高と西洋人との交流について、ミヒエル（二〇〇六）参照
- 51 相川忠臣（二〇〇九）
- 52 「大分懸病院兼醫学校報告」所収。高浦照明（一九八〇）、五七～五八頁
- 53 J. L. Pompe van Meerdervoort: Vijf jaren in Japan. Leiden: Van den Heuvel & Van Santen, 1867/68
- 54 第六〇巻は「種痘心法要旨」となっている
- 55 詳細について、富田英壽（二〇一〇）参照
- 56 ミヒエル（二〇〇七B）、一三～一四頁
- 57 川寫真人『中津藩蘭学の光芒 豊前中津医学史散歩』、四～七頁
- 58 中日伝統医学の舌診について、梁嶸（二〇〇八）参照
- 59 「奥平藩臣略譜集録」により。川寫真人（二〇〇九）参照

- 60 「惣町大帳」により。川寫真人(二〇〇九)参照
- 61 中津藩の財政について、『中津市史』(一九六五、六六七〜六八〇)および西澤直子(一九九四)参照
- 62 神尾雄朔、藤本玄岱について、大島明秀「青木周蔵の中津滞在期―富永家所蔵史料を中心に」参照
- 63 「惣町大帳」(二〇一一)、一一頁
- 64 「幸二同藩ノ医師藤野啓山ナル者少シク蘭字ヲ知り兼テ懇意ナルニ付夜分窃ニ藤野ノ宅ニ行テ原写ノ読合セラ依頼シテ三五回ニシテ終リ前後凡二十日間ニシテ儉写ノ事全ク成リ…」『福翁百餘話』(一九〇二)、七十頁
- 65 「惣町大帳」(二〇一一)、二二頁
- 66 「惣町大帳」(二〇一一)、二二頁
- 67 「惣町大帳」(二〇一一)、二六、三三頁
- 68 「惣町大帳」(二〇一一)、二二二頁
- 69 「惣町大帳」(二〇一一)、一四六頁
- 70 「惣町大帳」(二〇一一)、一一、二二、二五、二六、三三、三四、四一、四九、五〇、五一、五二、一四六、一七三、二二二頁
- 71 「市令録」第二輯、一〇二、一〇三〜一〇五、一四八(文久元年二月、八月、十一月)
- 72 「中津城跡」(二〇〇一)、四二〜四三頁参照
- 73 『藩政時代の教育』(一九二五)、二二三頁
- 74 広池千九郎(一八九二)、二五〇〜二五二頁
- 75 大島明秀(二〇一〇)
- 76 Lodewijk Meijer. Woordenschat. Amsterdam: Hendrik Boom, 1688
- 77 大江春塘の子孫について、川寫真人(一九九二)参照
- 78 出島商館長日誌、一八二二年四月九日(オランダ国立公文書館、NFI 235)
- 79 藤野玄洋の生涯について、川寫真人(二〇〇九B)参照
- 80 『大分県立病院兼医学学校第一次報告』、五頁
- 81 川寫真人(二〇〇九B)参照
- 82 竹原平次郎抄訳『化学入門』、東京府…万屋忠蔵(一貫堂)蔵版、「明治初期」(中津市大江医家史料館蔵)
- 83 川本幸民訳述『気海観瀾広義』、東京府…稲田佐兵衛、「明治初期」(中津市大江医家史料館蔵)。Johannes Buijs. Natuurkundig schoolboek. Leiden, 1800
- 84 入学年月は、山本艸堂編『下毛郡史』、六九三頁より。細田富多(二〇一〇)、『ミヒェル』(二〇一三一一、二〇一三一二)参照